

# 野外運動研究室ニュースレター

編集：筑波大学野外運動研究室広報係  
発行：筑波大学体育系野外運動研究室  
〒305-8574 つくば市天王台1-1-1  
TEL/FAX 029-853-6339  
URL <http://yagai.tsukubauniv.jp/>

## 【巻頭言】

「自戒」

山川 晃 (MC1)

私はこの春、筑波大学体育専門学群を卒業し、大学院に進学した。小学生の頃から10年以上続いていたサッカーをやめ、本格的に野外の勉強をしようと意気込んでこの舞台上上がったのだが、最近ではどうしても「慣れ」というものが出てきてしまっているように感じている。これを改めるため、これまで持っていた自分の信念のようなものを書き連ねていこうと思う。つまりこの巻頭言は、主として自分への戒めである。

私が高校1年生のとき、それまでJリーグのジェフ千葉で監督をしていたイビチャ・オシム氏が日本代表の監督に就任した。その哲学的でユーモアのある言葉の数々に、いつも感心していたのを覚えている。その彼の言葉の中でも最も私の記憶に残っている言葉がある。

— 自分達が歩むべき道を探していかなければならないのだ。日常生活の中で、平坦な道のりはない。上にあがっていくには何らかの危険を冒し、何かを犠牲にしなければならないのだ (オシムの言葉～フィールドの向こうに人生が見える～) —

自分の目指すところが高ければ高いほど、そこに行くための犠牲は多くなる。当然のことだが、ともするとその認識が薄れていきやすいのも現実であると思う。私はこの言葉に出会った高校時代、そして大学時代と、サッカーで成功するために多くを犠牲にしてきた。才能がある選手でないということは認識していたし、条件も非常に厳しいと分かっていたので、周りの誰よりも多くの犠牲を払わなければいけないと思っていた。しかし、犠牲があると認識しているからこそ、この道を全力で行こうと思えたのだ。

(結果的に成功にたどり着くことはできず、傍目には犠牲しか残っていない状況かもしれないが…)

サッカーをやめて半年が経ったが、私は未だ道の分岐にいる。というよりも、犠牲を払うことができずに登り始められていないのだろう。そして犠牲を必要としない現状に甘んじている。何かを犠牲にする覚悟はあるか？ スティックに登っていけるか？ という自分自身への問いを忘れず、常に上を向いていきたい。

さて、先ほどのオシムの発言にさらに別の発言を補足して終わりとしたいと思う。

— ただし、勉強を犠牲にしてはいけない —

## 【正課事業報告】

○野性の森整備実習

山川 晃 (MC1)

平成25年4月3日(水)～5日(金)にかけて、平成25年度整備実習が行われた。この実習は、野外運動研究室が管理している①施設や用具の点検と補修、②用具の理解、③室員間の交流と野性の森への愛着を持つことを狙いとしている。近年野外研は年々人数が減少しており、今回の実習も少人数で行うこととなった。しかし、室員一人一人の集中と協力により予定していたほとんどの作業を無事終えることができた。また5日の夕方からは野外研の新専攻生歓迎会が野生の森で開催され、今年度の野外研を全員で盛り上げていこうという士気を高められたと思う。来年度の整備実習まで施設や用具がきれいに保たれるよう、室員それぞれが丁寧に利用していくことを心がけて欲しい。

## 【課外事業報告】

○第17回日本キャンプ会議

清水 啓一 (MC2)

2013年5月25日(金)国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、公益社団法人日本キャンプ協会主催「第17回日本キャンプ会議」が行われた。研究室からは清水、加藤、佐藤そして渡邊先生が参加した。口頭発表の中で、私は昨年度主催した南会津アドベンチャーキャンプの実践報告を行い、それに対して聴衆から様々な意見や感想をもらうことができた。外部の発表の場には、様々な職業・立場の人々が集まっており、その環境から得られる自らの実践に対するリアクションはじつに新鮮であった。また、自らが聴衆の側になり、他の団体が行っている実践の内容を知ったり、研究室の諸先輩方の活躍ぶりを目の当たりにすることで、とてもよい刺激を受けることができたと感じている。

○第3回浅間大学院生セミナー

佐藤 冬果 (MC2)

2013年5月31日～6月2日(2泊3日)、安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター主催、第3回浅間大学院生セミナーが行われた。筑波大学からは佐藤一人の参加であったが、様々な大学で様々な

角度から「自然」や「環境」を学ぶ大学院生(環境教育系が多かった印象。)20名が集まり、自然に親しむグループワークに取り組んだり、先生方の講義を聞いたり、研究発表をしたり、ディスカッションしたり…と、プログラム盛りだくさんの3日間を過ごした。

中でも、印象的だったのはそれぞれの院生の研究発表である。それぞれが、専門的で非常に興味深い実践や研究を行っており、自分自身としても、そして野外運動研究室としても負けてられない、と刺激を受けた。そして、なんといっても毎晩深夜まで続く懇親会(という名の飲み会)である。たくさんの先生方や院生との出会い・つながりや、そして次から次へと湧き出てくる話題をこれでもか、というほど語り合った時間は、大きく言えば、人生の大きな転機すら与えてもらったと思う。

長野からつくばまで、眠気と戦いながらの運転だったが、その眠気さえ、心地よいほどの充実した3日間であった。野外研のみんなも、ぜひ積極的に外へ出て行って、色んな出会いをしてほしいと思う。

#### 【個人実践報告】

○国際ワークキャンプ VIVE27 at COLOLA in Mexico

藤田 花子 (UG4)

国際ワークキャンプ VIVE27 at COLOLA in Mexico は3月6日から3月22日の日程で行われ、参加者は日本人3、フランス人3、ドイツ人2、メキシコ人1、韓国人1、アメリカ人1、そしてリーダーのイスラエル人2人という構成だった。メキシコ西海岸、コロラという小さな村の一画にて、ココナツの葉で葺かれた屋根の小屋を拠点に主にウミガメの保護観察を行った。夜9時から浜を歩き、産卵のために来たカメを探す。発見時の環境、個体状態等を確認し、ときには卵を集め、観察区画で孵る子ガメは個体数を記録したのち、浜に放す。波の音に導かれて必死に這っていく様は「命」を感じさせ、波にのまれた後には言いようのない切なさを残していた。参加者の途中合流、途中離脱が多発し、最終的に20日に全員解散となる異例のキャンプとなった。文化の違いを大いに感じ、リーダーがどうあるべきかを考える機会にもなった。今後の活動に活かしていかなければと思う。

#### 【特別企画その1】

○おススメ野外関連本紹介コーナー

佐藤 冬果 (MC2)

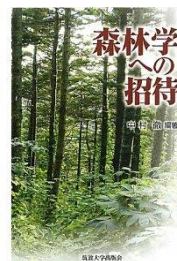
今回始まった書籍コーナーでは、野外活動に興味のあるみなさんにぜひ読んで貰いたい本を紹介していきます。

第1回目の今回は、あえて野外教育ど真ん中の本ではなく、我々の活動の場である「自然」に関する本を紹介します。

『草原の科学への招待』  
中村徹編著、筑波大学出版会、2007



『森林学への招待』  
中村徹編著、筑波大学出版会、2010



我々が専門とする野外運動は、その名の通り、野外での活動が基本です。しかも、自然環境が豊かな場所が活動の拠点になります。なので、自然環境に関する基本的な知識や感覚を持たずにそこへ踏み込むことは、ただの環境破壊になってしまう可能性を孕んでいるのです。

この本では、森林と草原について、様々な視点から解説されています。そして、各章を各分野の専門家の先生方が執筆しています。専門家向けではなく、基礎基本から解説してくれているので、理科なんてチンプンカンプンだよ、というような人でも理解できるのではないかと思います。そして何より、薄いです。読む前から読む気がなくなるような、字は小さくやたら厚い本という訳ではないので、ちょっと教養として知っておきたい、というようなモチベーションでも、十分に読み切ることが出来ると思います。

特に読んでほしいのは、森林の科学の第8章、「森林地域のスキー場開発」です。スキー場にしろ、キャンプ場にしろ、野外運動と自然環境の間にある様々な問題がぎゅーっと詰め込まれていると思います。ここだけでも読んでほしい。

私の大学時代の指導教官の先生はじめ、お世話になった先生方が執筆されているということもありますが、本当におすすめの本です。まずはこの本から、自然環境に関する勉強もスタートさせてみてはいかがでしょうか。

【特別企画その2】  
○必見！野外関連ムービー

清水 啓一 (MC2)

このコーナーでは筆者が日頃勉強に励む(?)傍らあくまで休憩時の暇つぶしとしてネットサーフィンを楽しんでいる最中に出会った素敵な野外関連の

動画コンテンツを紹介しします。



『インポッシブル・ウォール』

掲載元：YouTube

作成元：PatagoniaJP

URL <http://www.youtube.com/watch?v=PQLVJ2pwYUQ>

この動画はアウトドアウェア、スポーツウェアを製造、販売しているパタゴニア (patagonia) が作成し

ています。5 部作にわたる本シリーズは、4 人のクライマーたちが船長ボブ・シェプトンとともに未登のビッグウォールを見つけるためにグリーンランドのフィヨルドへと出帆したようすをドキュメントにしたものです。

このムービーの見どころはなんといっても登場するクライマーたちの狂人と呼ぶにふさわしい肉体・精神のタフさです。グリーンランドの厳しい寒さの中、ルート途中に吊るしたテントの中で楽器を演奏しながらはしゃぐ彼らの様子には私ははじめ唖然としてしまいました。ただでさえ軽くしたい装備の中に、登攀には一切無関係な「楽器」を加える意図とはいったい……。しかし、この動画を最後まで見終わった時、そんな疑問はすっかり晴れてしまいました。人間が「本能で楽しむ」ことを求める時、そこに理屈は要らないということを再認識したからです。

こんな素晴らしい動画の再生回数が 3 ケタに留まっているあたりがまた悲しいですが、今後も機会があればどんどん紹介していきます！

## リレーコラム～OB・OG からのメッセージ～



リレーコラム NO. 13

2000 年度卒業  
公益財団法人日本サッカー協会  
プレジデント・ヘッドクォーターズ  
漆間 亜美香 さん

こんにちは。2000 年度卒の漆間亜美香です。現在はサッカーの普及や育成に関わる仕事をしており、野外活動といったら、たまにスキーや山登りを楽しむレベルの一般人と化しています。さて、今回リレーメッセージを書くにあたり、大学時代をつらつら振り返っていたわけですが、体専はともすると部活に大半を費やし、あとは友達付き合いにバイト・飲み会（と勉強）になりがちなところ。野外研の活動や人脈を通して、様々な良い経験をさせてもらったなあと改めて感じました。

例えば、”現場”の経験です。花山キャンプなどでカウンセラーをさせてもらいました。色々な子供を相手に、自分の意図を理解してもらうための説明やアプローチを考えたり、また期間中は責任を持って一つの班や業務を担当する。こういった経験が、コミュニケーション能力や課題解決力、責任感というような「仕事」をする上でも重要な基礎の力をあげてくれたと思います（当時はそんなこと考えていませんでしたけどね）。

また、1 年生のときから研究室に出入りし、先輩方にけっこう遊んでもらっていました。教えてもらった”遊び”を通じて、自分の世界も広がりました。一時ハマっていたのがインラインスケート。花山キャンプの帰りに、そのまま上野でスケート靴を購入し、下手くそながら、飛んだり跳ねたり、パイプを滑ってこけて青あざを作ったり。部活（女子サッカー）のときもスケート履いてグラウンドに登場したら、さすがに好奇の目で見られましたが……。趣味という意味での広がりもそうですが、インラインを通じて仲良くなった他学の友達とは今でもよく会い、そこからまた別の友達もでき、体育の世界とは違った人脈が広がりました。先輩に感謝ですね。

と、ここまで青春の思い出を交えてお話ししましたが、何が言いたいかというと、学生のみなさんには、時間と体力はある今のうちに、野外活動はもちろん、様々なことにチャレンジして自分の幅を広げてもらいたいと思います。ありきたりなメッセージで恐縮ですが、社会人にならないとその大切さに気付かないんですよね、意外と。

では、みなさまの今後のご活躍を期待しております！（わたしもがんばります。）

### 【編集後記】

遅ればせながら今年度 NL の第 1 号を発刊することができました。今年度は年 4 回の発刊を予定しています。また、2 つの新企画が始まり、今後も内容を少しずつ充実させていければと思っています。ご意見ご感想等がありましたら、4 月にリニューアルされた野外運動研究室 HP までお問い合わせください。